

48. 《お台場の誕生》

1853年（嘉永6）7月8日、ペリーが黒船4隻（うち蒸気船は2隻）を率いて浦賀に現れます。幕府は、アメリカ大統領の親書を受け取りますが、その返答を1年後にすることで決着します。そして幕府は、急いで海防強化の大改革を行います。

江戸を外国艦隊から守るため、江川太郎左衛門（注1）に命じ、迎撃する砲台群を、急ピッチで品川沖に作ります。砲台には、佐賀藩製の洋式砲を備え付け、管理は、川越藩、会津藩、忍藩が行いました。（注2）

また幕府は、オランダから軍艦を購入します。それが、咸臨丸です。（注3）ちなみに、ペリー来航時には、佐賀藩において、洋書を手がかりに蒸気機関の試作模型が作られており、国産の蒸気船は12年後に完成しています。（注4）

洋式船を操舵するには訓練をした人々が必要です。そこで、長崎に海軍伝習所を作り、オランダ人の教官を招いて幕府はもとより各藩の若者を教育します。その若者の中に、これから活躍する勝海舟や五代友厚らがいました。（注5）

ペリーは、約束よりも早く半年後に再来。今度は6隻も引き連れて来ました。江戸に直行しようとしませんが、台場によって行く手を塞がれ、横浜まで引き返します。そして横浜において、日米和親条約が締結されました。これにより、下田が即時開港、箱館（函館）が1年後開港と決まり、幕府の鎖国政策は終わりを告げます。

注1：砲台群は、海上に5基が完成。これが、東京臨海副都心地区「お台場」の名前の由来となっています。

注2：江川太郎左衛門（英龍：1801－1855年）は、伊豆菰山の代官。老中阿部正弘に勘定吟味役格に登用され台場を築造します。また菰山に反射炉を構築し、銃砲製作も行ったとされますが、反射炉と洋式砲の技術は、佐賀藩の方が進んでいました。

注3：咸臨丸は、1857年（安政4）就役。長崎海軍伝習所の練習艦となり、1860年（万延元）、勝海舟や福澤諭吉を乗せて太平洋を往復します。全長48.8m、全幅8.74m、3本マストの蒸気スクリュウー船。

注4：佐賀藩に「からくり儀右衛門」こと田中久重が居て、蒸気機関の試作模型から、実用化までこぎつけます。そして最初の国産蒸気船は、黒船来航後12年目の1865年に竣工した佐賀藩の「凌風丸」でした。翌年、幕府も軍艦「千代田形」（搭載蒸気機関は佐賀

藩製)を竣工します。

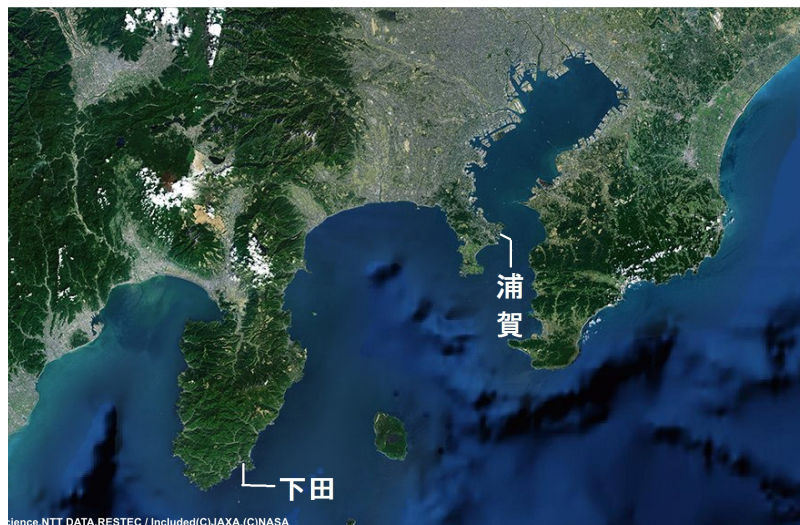
注5：勝海舟(生没年：1823－1899年)は、後に幕府の軍事総裁として新政府軍と交渉し、江戸城無血開城を実現します。五代友厚(生没年：1836－1885年)は、後に関西経済界を近代化しました。

写真は、①ペリー提督横浜上陸の図(横浜開港資料館)、③浦賀、下田の位置(Yahoo 航空写真に細見記入)、③台場(Yahoo 航空写真に細見記入)、④咸臨丸(第12回咸臨丸フェスティバル1日ミュージアムの展示模型HPより)

①



②



③



④

